

シャインマスカット効果

—都市化やマッチングアプリが婚活にもたらす光と影—

高橋征仁

今年で30歳になります。高くなった理想はもう元には戻せません。一度シャインマスカットを食べた後にスーパーの小汚いブドウは食べれないでしょう？私ももう山形には戻ることは出来ないのです。いまさらどんな顔してあのクソ田舎に帰れって言うんですか？私が生きる場所ではありません。

——旧ツイッターの投稿より

1. シャインマスカット効果：性的自律性の増大による選り好みの強化

2022年9月、ハイスペックな男性（ハイスぺ男子）を求めて、東京都内で婚活中の女性（設定）が、旧ツイッターで上記のようなつぶやきを行い、大バズりした。これに続く一連のツイートでは、投稿者が山形から上京するまでの経緯や、憧れの「港区女子」にはなり切れない現状、ハイスぺ男子に遊ばれ、捨てられた過去のエピソードなどが綴られていた。これに対するコメントとしては、一般的なスペックの男性を「スーパーの小汚いブドウ」呼ばわりするような投稿者の差別意識こそが婚活差別を助長しているという非難や、投稿者がハイスぺ男子の餌食になっているのも所詮自業自得であるといった嘲笑が数多くみられた¹⁾。まもなくして、このツイートには、なりすましの男性作家による創作疑惑が持ち上がり、盛り上がりは収束した。後になって思えば、投稿者は、非モテ男性たちがこのツイートを読んで留飲を下げること（シャーデン・フロイデ）を予め狙ってストーリーを作成し、実際にそれが大バズりしたのであろう。

本稿でこのツイートを主題として取りあげる理由は、たとえそれがいかに下品で嘘塗れであろうとも、そこに、一定の真実—しかも、研究者も官僚も触れたがらないタブー—が述べられていると考えるからである。この「シャインマスカット」という言葉が示しているのは、豊かで自由な都市生活を通じて女性の選り好みが強化され、後戻りができなくなるというパラドクスにほかならない。性的自律性の増大は、男性においてはモテ格差の拡大をもたらすのに対して、女性においては、選り好みの強化をもたらす。その結果、「本人の自由」という名目の下で、不本意ながらも非婚という現実を引き受けざるを得ない男女が増えてくる。このような自由と決定のパラドクスは、都市居住だけでなくマッチングアプリやその他の出会いの機会の増大についても、おそらくあてはまるだろう。

多くの若者たちが、表向きの理由は進学や就職であれ、心のどこかでは新たな異性との出会いを期待して自由な都市に集う²⁾。しかし、その結末は必ずしも期待通りのものにはならない。図1に示した50歳時未婚率のデータは、実際には、20～30年前の若者た

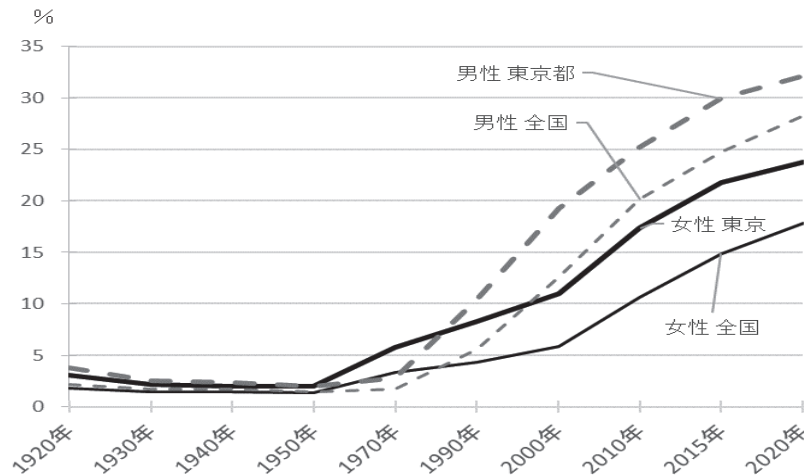


図1. 50歳時未婚割合の変化(全国男女と東京都男女)
国立社会保障・人口問題研究所（2023）をもとに筆者が作成した。2015年以降は不詳補完値を用いている。

ち（20～30 歳時点）の行動選択の結果を示している。この点を考えれば、1950 年頃（図中 1970 年）には、全国に先んじて東京都の女性の未婚化傾向が顕著になり、1970 年頃（図中 1990 年）には、若者の未婚率が男女で逆転していたことになる³⁾。

東京圏（東京都、神奈川県、埼玉県、千葉県）でいえば、毎年 10 万人前後の転入超過がみられ、そのほとんどが 10 代後半と 20 代の若者たちである（総務省統計局 2023）。こうした若者たちの一極集中にもかかわらず、東京圏の男性の 50 歳時未婚率は、東京都 32.1%、埼玉県 30.2%、神奈川県 30.1%、千葉県 29.9%と、全国の 1 位から 4 位までを独占している。これに対して女性では、東京都が 23.8%で全国 1 位であるものの、それ以外の 3 県は神奈川県 17.3%（全国 17 位）、千葉県 16.8%（全国 19 位）、埼玉県 16.7%（全国 20 位）と全国平均の 17.8%を下回っている。このような性別による未婚の非対称性は、数値的には、離死別経験のある男性との結婚（時間差一夫多妻制）や先進国の男性との国際結婚によって埋められることになる。しかし、そうした非対称性を推し進めている真の要因は、女性の選り好み実在する男性を超えて強くなっていること以外に、いったいどんな理屈が考えられるだろうか？

ところが、この都市居住と未婚化の関係をめぐる研究では、しばしば奇妙な因果逆転が生じている。というのも、都市における職業生活の充実や生活水準の質の高さ、婚姻規範や家規範からの解放などによって、都市部の女性の未婚化が促進されているといった循環的な説明が行われるからである。これらの条件は、結婚も含めたよりよいライフコースのための条件として設定されていたはずなのに、いつの間にか、未婚化の原因としても転用されている。その代表例は、都市における「おひとりさま」向けサービスの充実といった説明であり、これは都市における単身者の増大の結果であるにもかかわらず、いつのまにか未婚化の原因としても堂々と用いられている。しかしながら、そもそも、若者たちは、「おひとりさま」向けサービスを利用したり、ただ自分の生活水準を上げたりする目的で、

都市移動したのだろうか？故郷を離れる真の目的が、自分自身の快適さや損得勘定ではなく次世代にあることくらい、過酷な生活環境下でも働き続ける移民第1世代の例などを考えれば、すぐにわかることだろう。

このような循環論法は、実のところ、結婚や出産、養育をめぐって女性たち（時には男性も）が日々奮闘している社会的現実からも目を背けたものと言わざるをえない。というのも、首尾よく都市圏で結婚した女性たちが次に向かう先は、よりよい出産のため「妊活」であり、子どもの才能を開花させるための幼稚園・保育園探しであり、有名私立小学校・中学校の「お受験」であり、果ては、「孫の顔をみたい」という動機から、子どもたちに代わって行く「代理婚活」といった壮絶な「課金ゲーム」（高瀬 2018）である。このプロセスにおける計り知れないほどの自己犠牲の量を考えれば、結婚をめぐる賭け金になっているのは、基本的には「子ども」（孫、ひ孫…として世代間で複製継承されていく遺伝子）であることは間違いないだろう。それを自分自身の生活の快適さや女/男らしさのジェンダー規範へのこだわりで還元して説明するのは、本末転倒である。

異性に対する選り好みも居住地に対する選り好みも、未知の「子ども」の形質やスタート条件をめぐる選定であるからこそ、安易に妥協することはできない。そのため、婚活は、ラチェットレンチのように一方的に強化され、後戻りできないチキンレースになってしまう。「子ども」が賭け金であるからこそ、自分自身の形質やその養育環境よりも劣った条件を受け付けない下方硬直性が生じることになる。未婚化や少子化をめぐる問題の核心に位置しているのは、このような「子ども」に対する期待の高規格化と高コスト化にほかならない。政府や自治体による様々な子育て支援が、出生数の増加に結び付かないのも、そうした子育て支援が一律に行われる限り、結果的に子どもの高規格化と高コスト化をさらに助長してしまうからである（高橋 2010、参照）。

もちろん、これまで社会学においても、女性の選り好みの強さは「女子上昇婚（hypergamy）」という形で議論されてきた。たとえば、上野千鶴子（1990、1994）は、マルクス主義フェミニズムの立場から、女性では、業績的達成による階層移動が制限されているために、結婚を通じて配偶者の所属階層への移動が行われてきたとしている。しかしながら、こうした代理的地位達成という説明では、学歴や年収などの面でより成功している自由な女性ほど、上昇婚志向がより強いという事実を説明できない。他方、山田昌弘（1999）は、都市部の女性において未婚化が進行するのは、経済の低成長によって、父親よりも高い生活水準を提供できる適齢期の男性がいなくなったためであると指摘している。そして、そうした現実にも関わらず、女子上昇婚志向から人々が抜け出せないのは、幼児期に埋め込まれた女/男らしさのジェンダー規範から抜け出せないためであると説明している（山田 2016）。しかしながら、女性の選り好みは、必ずしも自分の生活水準の維持を目的とはしていないし、現代では、「男らしさ」よりも女性的・中性的な特徴が好まれることの方がはるかに多い（高橋・染川 2023、Prum 2017）。

もっとも、上野や山田のような卓越した社会学者たちが、恋愛や結婚の賭け金が本当は

「子ども」であることに気づいていないわけではないだろう。そうではなくて、この点に言及することが恋愛や結婚に潜む差別や「素朴優生学」（普通の人々が無意識的・直感的に「子ども」の質の向上を図ること）というナイーブな問題を喚起してしまうために、できるだけこの論点を回避しようとして議論を構成しようとしたにちがいない。

周知のとおり、第2次世界大戦後の日本では、敗戦に伴う空前のベビーブームによって、合計特殊出生率が4.5前後にまで達していた。こうした人口爆発による食糧不足や貧困化、そして貧困赤化（共産主義化）を懸念した旧厚生省や連合国軍総司令部（GHQ）は、優生保護法の制定（1948年）や「家族計画運動」の展開という形で、大規模な人口抑制（産児制限）政策を実施した（荻野 2008、山本 2011）。全国の医療関係者や民間組織、企業、農村団体を巻き込んだこの猛烈な運動によって、日本社会は、1950年代前半のたった5年間で合計特殊出生率を2.48にまで激減させることに成功した。

この「国民的偉業」においては、100万件を超える人工妊娠中絶手術が9年間続けられると同時に、子どもへの＜愛情＞という名の下に、「子ども」に対する期待の高規格化と高コスト化が強力に推し進められた。こうした「子ども」の高規格化と高コスト化にストップをかける手立てがないまま現在に至っているというのが、日本の少子化・未婚化の真相であろう。こうした歴史的経緯を知っているはずの人口学者や社会学者、厚労官僚たちの誰もが、この戦後復興と少子化の原点に言及しないのは、そこに、膨大な数の人工妊娠中絶手術の是非とより高規格の「子ども」を望む素朴優生学の問題が存在しているからであろう。配偶者選択における選り好みは、このような「子ども」選びの高次化を反映しており、個人にとっても社会にとっても重大事のはずである。しかし、あまりにも重大な問題であるがために、誰か先に言及した者に責任が押し付けられてしまう、まさに「部屋の中の象」となっている⁴⁾。

それにもかかわらず、本稿で、この問題を取り上げるのは、配偶者選択における人間の選り好みのあり方を理解することが、人間の素朴優生学の正体を突き止め、未婚化・少子化のメカニズムを解明することにつながると期待するからである。戦後の社会科学で一般的に行われてきたように、進化や遺伝の影響力を否定し、生まれつきの性差や人種差はないと一方的に宣言したところで、それはたんなる自己欺瞞にすぎない。遺伝の影響力を否定しても優生学に対する免罪符には決してならない。というのも、人々は配偶戦略や出産・養育戦略を介して、実際には遺伝か学習かを単純には2分できない様々な次世代の形質を選び取っているという厳然たる事実が存在するからである。もちろん、選択されている形質が、必ずしも「適応的」で「優秀な」ものとも限らないし、そのように選択すべき必然性もない。したがって、人間の多様性の理解やより平等な社会という課題に向き合うためには、人々が無意識的、直感的に行っている選別のまなざしを「なかったこと」にするのではなく、むしろそれを積極的に科学的分析の俎上に載せることが不可欠のはずである。

以上のような問題関心から、本稿においては、配偶者選択にみられるシャインマスクット効果を中心テーマとして取り上げ、検討を進めていくことにしたい。

2. 研究方法—山口県と福岡県における配偶者選好に関する調査研究

2.1. リサーチクエスションと調査項目の設計

本稿で使用するデータは、「山口県と福岡県における配偶者選好に関する調査研究」によって得られたものである。この調査では、配偶者選択における女性の選り好みを明らかにするために、C.Darwin の「性選択理論」(1871) やそれを展開した R.Trivers (1972) の「親の投資理論」、R. Prum (2017) の「美の進化理論」を念頭に置きながら、次のような 3 つのリサーチクエスションを設定した。

- ①配偶者選択における選り好みは、どのような要素を対象にしており、男女でどのように異なっているのか（配偶者選択における選り好みとその性差）。
- ②配偶者選択における上昇婚志向や選り好みは、子どもに対する投資意向とどのように関連しているのか（上昇婚志向と子どもへの投資意向の関連）。
- ③都市居住やマッチングアプリの利用などによる性的自律性の増大は、選り好みの強化や未婚化とどのように関連しているのか（シャインマスカット効果）。

そして、これらの問題を具体的に明らかにするために、この調査では、次のような質問項目を設定した（ここでは、本稿で使用する項目のみを提示している）。

- A 基本属性：性別、年齢、居住地、結婚しているか、大卒以上か
- B 簡易ビッグファイブ尺度：正逆 2 項目による開放性得点、勤勉性得点、外向性得点、協調性得点、神経症性得点
- C 結婚相手についての条件重視度：顔が魅力的、高い経済力が見込める、頭がよい、スタイルが魅力的、運動神経がよい、家事や育児を行ってくれる、安定した職業につく見込みが高い、見た目が若く健康的、浮気をしない、穏やかな性格の 10 項目について、「かなり重視する」～「全く重視しない」の 5 件法
- D 各結婚条件に対する自信度：上記 10 項目に自分が「あてはまる」か否かの 5 件法
- E 都市志向：「福岡市内」、「山口市内」、「萩市内」に定住予定の異性について、結婚相手としての魅力度を 6 件法で回答
- F 上昇婚志向とその他の生活水準についての 5 段階評価：現在の自分の生活水準、自分の親の生活水準、結婚相手に期待する生活水準（＝上昇婚志向）、独身の場合に希望する生活水準、子どもに与えたい生活水準（＝子どもへの投資意向）の 5 項目について、上・中の上・中・中の下・下の 5 段階から回答
- G マッチングアプリ利用経験（利用経験と交際経験の有無、友人の利用状態）

これら A～G の質問項目を含めた大問 20 問（大問 1 つは 5～10 項目）から成る調査票をセルフアンケートツール Questant（クエスタント）を用いて作成した。A 基本属性と F 上昇婚志向以外では、ランダムに質問項目が出現するように設定した。そして、この調査票を含めた研究計画について、山口大学「人を対象とする一般的な研究に関する審査委員会」による倫理審査を受けたのちに、調査を開始した（管理番号:2022-074-01）。

2.2. 調査協力者とデータ・クリーニング

上述した調査票には、恋愛や結婚に関するセンシティブな調査項目が含まれているため、回答の際の抵抗感を和らげることが必要であると考え、匿名協力者を対象とした WEB アンケート方式で実施することにした。具体的には、GMO リサーチ運営の Japan Cloud Panel の登録者にアンケートを配信・回収する有料サービスを利用した。このサービスでは、協力者の性別・年代・居住地（県）ごとにサンプル数を設計できるため、表 1 の左列のように、1080 人分を割り当てた。性別や年代、居住地によって設計数がバラバラなのは、利用可能なモニター数に一部制限があったためである。また、この調査で、福岡県と山口県を対象地に選んだのは、九州・山口地区の若者たちにとって、福岡市が格段の求心力を持つことから、都市居住をめぐる選り好みを調べるうえで最適であると考えたからである。

表1. 設計票数と回収票数、有効票数

	設計票数		回収票数		有効票数		性別県別合計(既婚)
	20～29歳	30～39歳	20～29歳	30～39歳	20～29歳 (既婚)	30～39歳 (既婚)	
女性 山口県	70	110	80	127	48 (19)	95 (56)	143 (75)
福岡県	250	250	282	276	212 (47)	213 (100)	425 (147)
男性 山口県	30	50	34	57	18 (3)	28 (11)	46 (14)
福岡県	120	200	134	223	64 (7)	129 (66)	193 (73)
年代別合計	470	610	530	683	342 (76)	465 (233)	
全体		1,080		1,213			807 (309)

()内の数字は、既婚者数を示す。

WEB アンケートは、2022 年 12 月 1 日～5 日の 5 日間で行われ、全体で 1,511 件のアクセスがあり、そのうち回答を完了したケースは 1,213 (86.8%、表 1 中央)であった。しかしながら、WEB アンケートにおいては、回答者が報酬ポイントを効率よく稼ぐために、「サティファイス」と呼ばれる手抜き方略を用いることが知られている (三浦・小林 2015)。これに対応するために、この調査では、表 2 に示したように、①回答時間が 5 分未満、②文章の読み飛ばしチェック (この文章を読んでいる人は必ず 4 を選択してください) の誤答、③基本属性の回答にかかわる論理矛盾、④低反応回答 (10 項目のうち 9 回以上同じ選択肢を回答) を全体で 5 回以上行っている、の 4 条件に該当する 406 ケース (回収票の 33.5%) を分析から除外した。その結果、有効票数は 807、そのうち離死別経験者を含む独身者数は 498 名であった。

表2. 調査票の除外票数とその理由

	有効票数	除外票数	除外理由			
			回答時間 5分未満	読み飛ば し	論理矛盾	低反応回答 5回以上
女性	568	197	78	127	58	37
男性	239	209	93	157	60	67
全体	807	406	171	384	118	104

複数の除外理由に該当するケースがあるため、理由の合計値は除外票数を超える

3. 結果—家庭性、地位、外見、都市志向をめぐる選り好みと強化要因

3.1. 配偶者選択における選り好みとその性差

配偶者選好においてどのような性差がみられるのか、ここでは、C 結婚条件重視度と D 結婚条件自信度における性差を検討することにした。表 3 は、結婚相手のそれぞれの条件に対して、独身対象者はどの程度重視するのか（結婚条件重視度）、またどの程度自分にあてはまるのか（結婚条件自信度）について、男女別に平均値を求めたものである。

表3. 結婚相手に対する条件重視度と自信度における性差（独身者N=498）

グループ	項目	C結婚条件重視度(5件法)			D結婚条件自信度(5件法)		
		女性(346)	男性(152)	t 値	女性(346)	男性(152)	t 値
家庭性	浮気をしない	4.56	4.28	3.18 ***	4.49	4.25	2.60 **
	穏やかな性格	4.50	4.18	4.44 ***	3.41	3.78	-3.70 ***
	家事や育児を行ってくれる	4.38	3.82	7.43 ***	3.88	3.61	2.60 **
地位	安定した職業につく見込みが高い	4.08	3.15	9.88 ***	2.88	2.95	-0.51
	高い経済力が見込める	3.72	3.11	6.95 ***	2.25	2.50	-2.26 *
	頭がよい	3.32	3.28	0.40	2.73	2.95	-2.08 *
外見	顔が魅力的	3.53	3.78	-2.71 **	2.50	2.53	-0.30
	スタイルが魅力的	3.23	3.43	-2.17 *	2.50	2.53	-0.27
	見た目が若く健康的	3.54	3.67	-1.56	3.30	3.14	1.50
除外	運動神経がよい	2.81	2.34	4.61 ***	2.43	2.91	-3.84 ***

*** p<.001, **p<.01, *p<.05

この表によると、C 結婚条件重視度については、男女とも「浮気をしない」や「穏やかな性格」という家庭性を重視する傾向がみられた。性差に関していえば、「頭がよい」と「見た目が若く健康的」以外の全項目で統計的に有意な差がみられた。とりわけ、「安定した職業に就く見込みが高い」と「家事や育児を行ってくれる」については、女性の重視度が高い。他方、「顔が魅力的」や「スタイルが魅力的」に関しては、男性の方が重視する傾向が見られた。これに対して、D 結婚条件自信度に関しては、全体的に得点が低くなっている。また性差も比較的小さい。「浮気をしない方だ」と「家事や育児をする方だ」の 2 項目では女性の自信度が高く、「穏やかな性格」や「高い経済力」、「頭がよい」では男性の自信度が高い傾向が見られた。

これら C 結婚条件重視度の 10 項目について、すべての協力者のデータについて因子分析（最尤法・プロマックス回転）を行ったところ、「家庭性」因子、「地位」因子、「外見」因子の 3 因子が抽出された（図表略）。そこで、因子負荷量の高い 3 項目の合計点をそれぞれ求めて、新たに「家庭性重視度」、「地位重視度」、「外見重視度」の 3 変数を作成した。D 結婚条件自信度については、結婚条件重視度のグループに対応するように、「家庭性自信度」、「地位自信度」、「外見自信度」の 3 変数を新たに作成した。

図 2 は、この新たに作成した 6 変数について、それぞれ独身者の平均値を示したものである。この図からは、①男女とも、重視度でも自信度でも「家庭性」の得点が最も高いことがわかる。②「地位」に関しては、男性に比べ女性の重視度が高いものの、自信度では

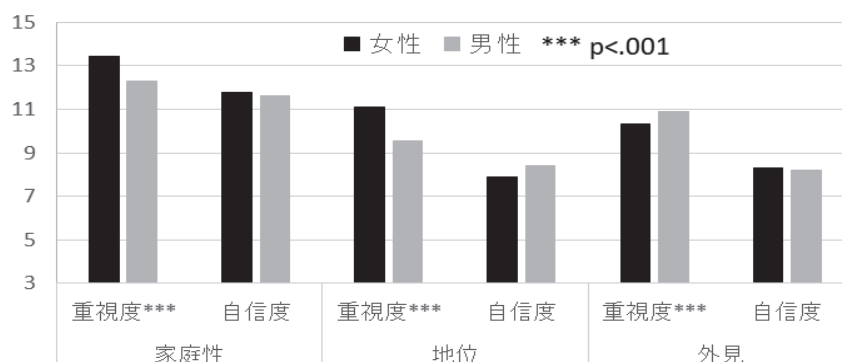


図2. 結婚相手に対する条件重視度と自信度(独身者)

男女とも低く、性差が見られない。③「外見」に関しては、男性の重視度が比較的高くなっているが、男女とも自信度は低く、性差はみられなかった。結婚条件に関しては、女性が「地位」や「家庭性」を、男性が「外見」を重視しているものの、男女ともに自信度が低いことがわかる。

次に、独身者におけるE都市志向を見てみよう。図3は、「福岡市内に定住予定の異性」、「山口市内に定住予定の異性」、「萩市内に定住予定の異性」が、それぞれ結婚相手としてのどの程度望ましいかについて、6件法の回答の平均値を比較した結果である。男性でも女性でも、福岡市内の居住者は、「福岡市内」の異性に対する評価(福岡志向)が非常に高く、平均で5点前後のスコアとなっている。それだけでなく、福岡県の女性では、「山口市内」や「萩市内」の異性に対する評価が極端に低くなっており、強力な下方硬直性が働いていることがわかる。そうした居住地に対する評価のギャップは、福岡市>その他福岡県>山口県の順に大きく、また男性よりも女性で大きくなっている。山口県内の回答者では、男女とも「山口市内」の異性に対する評価が最も高くなっているが、山口県内の女性でも、「萩市内」の異性よりも、「福岡市内」の異性のほうを高く評価する傾向が見られた。

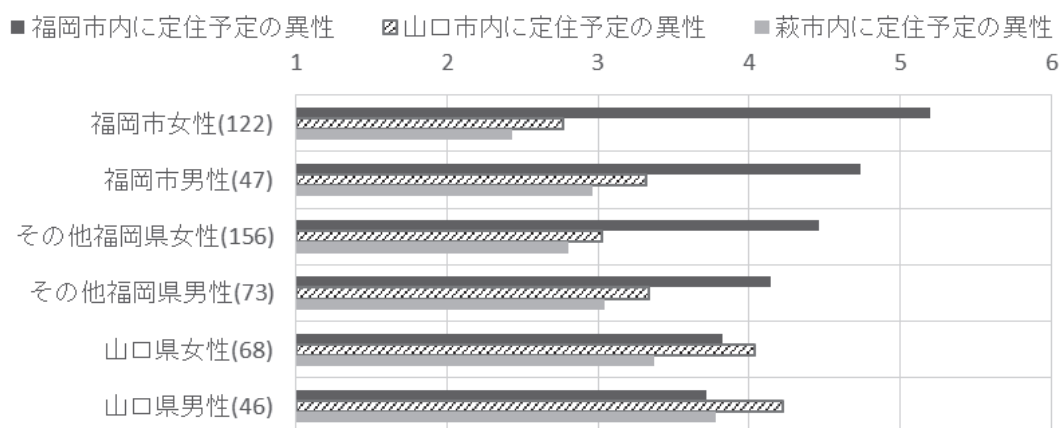


図3. 配偶相手の居住地に対する選り好み(独身者)

3.2. 子どもへの投資意向と上昇婚志向の関連

F 結婚相手に希望する生活水準（上昇婚志向）とその他の生活水準についての回答は、「上・中の上・中・中の下・下」の5段階で評価が行われた。表4左列では、それらの回答に5～1点を与えた場合の平均値を男女別に示している（独身者のみ）。結婚相手に希望する生活水準は、先の「地位重視度」と同様、女性のほうで平均値が高くなっていた。また各項目を比較すると、男女とも、「子どもに与えたい生活水準」（子どもへの投資意向）の平均値が最も高く、この点で性差はみられなかった。

表4. 上昇婚志向および他の生活水準についての男女別平均値、および偏相関係数(独身者)

	平均値とt検定			結婚相手に希望する生活水準との偏相関係数(統制変数=年齢)	
	女性(346)	男性(152)	t値	女性(346)	男性(152)
自分の現在の生活水準	2.31	2.24	.73	.171	.277 ***
自分の親の生活水準(山田説)	2.78	2.79	-.10	.080	.086
結婚相手に希望する生活水準(上昇婚志向)	3.31	2.84	6.74 ***	—	—
独身の場合に希望する生活水準	3.05	3.11	-.59	.418 ***	.525 ***
子どもに与えたい生活水準(Trivers説)	3.51	3.47	.52	.461 ***	.312 ***
自分の希望水準と現在の差(上野説)	.74	.86	-1.27	.196 ***	.223 **
項目の順序は調査票での提示順を示す				*** p<.001, ** p<.01, * p<.05	

この女子上昇婚志向の要因として、上野（1990、1994）説では社会的抑圧（希望と現在の格差）、山田（1999）説では父親の生活水準の高さが指摘されていた。これらに対して、Trivers（1972）は、子どもへの投資量の多い方の性（通常はメス）で選り好みが行われ、反対の性では性内競争（通常はオス）が行われるとした。これら3つの仮説の経験的妥当性を検討するために、表4右列では、上昇婚志向と生活水準の各変数について、年齢を統制した場合の偏相関係数を示している。

この表4によると、上昇婚志向との関連が最も強いのは、女性では「子どもに与えたい生活水準」（Trivers説）であり、男性では「独身の場合に希望する生活水準」であった（表4右列網掛け部分）。また、「子どもに与えたい生活水準」に関しては、男女で偏相関係数の値が大きく異なっていた。これらの点から考えると、男性とは異なり、女子上昇婚志向の最大の要因は、子どもへの投資意向にある（Trivers説）と考えられる。他方、「希望する生活水準と現在の生活水準の差」（上野説）や「自分の親の生活水準」（山田説）については、上昇婚志向との関連は比較的弱いものであった。

また、この「子どもに与えたい生活水準」（子どもへの投資意向）は、独身女性の場合でも、「地位重視度」や「家庭性重視度」、「福岡市内に定住予定の異性」（福岡志向）の選り好みとも、弱い正の関連が見られた（表5）。他方、独身男性においては、統計的に有意な関連がみられなかった。こうしたことから、子どもに対する投資意向が、女性の選り好みに潜在的に作用していると考えられる。

表5. 「子どもに与えたい生活水準」と選り好みに関する偏相関係数(統制変数＝年齢)

	家庭性重視度	地位重視度	外見重視度	都市志向
女性(344)	.087	.135 *	.107 *	.140 **
男性(150)	.111	.099	.147	.068

** p<.01, * p<.05

3.3. シャインマスカット効果—都市化とマッチングアプリによる選り好み強化と未婚化

最後に、都市居住やマッチングアプリの利用といった機会の増大と、選り好みや未婚化との関連について検討したい。今回の調査では、2020年の新型コロナウイルスの流行以降、男女の出会いの場として急速に普及したマッチングアプリにも焦点を当てていた。調査対象者では男性の25.5%、女性の20.6%が「マッチングアプリによる交際相手探し」を経験していた。また男性の36.8%、女性の40.7%は、自分の友人の中で、「マッチングアプリで知り合った異性と交際している」人がいると回答していた。こうした自由な選択機会の増大は、女性の場合、都市居住と同様に、選り好みの強化をもたらすと考えられる。

そこでまず、「福岡市内居住」や「マッチングアプリ利用経験」が、どのように調査協力者の選り好みと関連しているのかを検討した。表6に示したのは、ここまで取り上げた5種類の選り好み(家庭性重視度、地位重視度、外見重視度、福岡志向、上昇婚志向)を従属変数として、基本属性や条件自信度、子どもへの投資意向、選択機会の増大の8変数を独立変数として、ステップワイズで重回帰分析を行った結果である。この表によると、「福岡市内居住」の場合には、男女ともに福岡志向が強くなるだけでなく、女性では「家庭性重視度」も強くなる傾向が見られた。他方、「マッチングアプリ利用経験」がある者ほど、「地位重視度」や「外見重視度」、「福岡志向」が高いという正の関連が見られた。

表6. 選り好みを従属変数とした重回帰分析の結果(独身者+既婚者)

		家庭性重視度		地位重視度		外見重視度		福岡志向		上昇婚志向	
		女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性
基本属性	年齢(20-39)	-.135 ***		.169 ***						.105 **	
	大卒以上か否か(0-1)			.089 *							
条件自信度	家庭性自信度(3-15)	.210 ***	.241 *	-.088 *		-.125 **		.102 **		-.110 **	
	地位自信度(3-15)			.151 ***		.088 *					
	外見自信度(3-15)			.124 **		.273 ***		.199 **		.191 ***	
子どもへの投資意向	子どもに与えたい生活水準(1-5)	.131 *		.104 *						.466 ***	
	経験(0-1)			.134 ***		.111 **		.113 **			
選択機会の増大	福岡市内居住(0-1)	.090 *						.326 ***		.244 ***	
	マッチングアプリ利用経験(0-1)										
調整済みR ²		.071 ***	.069 *	.106 ***		.103 ***		.134 ***		.055 ***	
N		562	235	562	235	562	235	562	235	562	235

*** p<.001, ** p<.01, * p<.05

次に、「福岡市内居住」や「マッチングアプリ利用経験」といった選択機会の増大が結婚とどのような関係にあるのかを検討するために、「結婚の有無」を従属変数とした 2 項ロジスティック回帰分析を行った。表 7 によると、男性でも女性でも、「年齢」や「外向性得点」、「外見自信度」が高い者ほど結婚している割合が高いという正の関連が見られた。他方、「結婚の有無」との関連が、男女で異なっている変数も見られた。女性においては、「外見重視度」の高い者ほど、また「福岡市内居住」している者や、「マッチングアプリ利用経験」のある者ほど、結婚している割合が低いという負の関連が見られた。また男性では、「開放性得点」が高い者ほど結婚していないという傾向も見られた。

これら 2 つの分析結果を見る限り、「福岡市内居住」や「マッチングアプリ利用経験」は、女性の場合、配偶者選択における複数の選り好みの強化と関連しているだけでなく、未婚化とも直接的・間接的に関連していると考えられる。もちろん、「マッチングアプリ利用経験」に関しては、「もともと選り好みの強い人が利用している」とか、「結婚していないから利用している」といった逆因果や双方向因果の可能性もありうる。しかしながら、男性の場合、そうした関連がかなり弱いことを考えると、女性でだけ「マッチングアプリ利用経験」と「結婚」にかなり強い負の関連がみられる点には注目する必要があるだろう。

表7. 結婚に関する2項ロジスティック回帰分析の結果(独身者+既婚者)

		女性(結婚n=222)		男性(結婚n=87)	
独立変数		B	Exp(B)	B	Exp(B)
基本属性	年齢(20-39)	.128	1.136 ***	.210	1.234 ***
	大学以上(0-1)	-.267	.766	.412	1.510
ビッグファイブ	外向性得点(2-14)	.124	1.133 ***	.250	1.284 ***
	開放性得点(2-14)	-.081	.922	-.233	.792 **
条件重視度	家庭性重視度(3-15)	.001	1.001	.102	1.108
	地位重視度(3-15)	.011	1.011	-.104	.902
	外見重視度(3-15)	-.147	.863 **	.027	1.027
条件自信度	家庭性自信度(3-15)	-.001	.999	-.044	.957
	地位自信度(3-15)	.045	1.046	.150	1.161
	外見自信度(3-15)	.093	1.098 *	.226	1.253 **
選択機会の増大	福岡市内在住(0-1)	-.612	.542 **	-.667	.513
	マッチングアプリ利用経験(0-1)	-1.375	.253 ***	-.428	.652
-2 対数尤度		626.626		223.178	
Cox-Snell R2 乗		.202		.305	
Nagelkerke R2 乗		.273		.417	
χ^2		126.650		85.504	
N		568		235	

*** p<.001, ** p<.01, * p<.05

4. 考察

4.1. 配偶者選択における選り好みとその性差

これまで、進化心理学において、男性の社会的・経済的地位に対する女性の選り好みは、女性の美貌や若さに対する男性の選り好みと対比的に理解され、性別による非対称性が強

調されてきた (Buss 1994、 Miller 2000、 参照)。今回の調査結果でみられた「地位重視度」や「上昇婚志向」は女性で強く、「外見重視度」は男性で強いという傾向も、このような知見に基本的に合致しているといえる。

しかしながら、こうした知見は、次の 2 つの点から再検討する必要があるように思われる。1 つには、「家庭性重視度」や「福岡志向」に関する選り好みのほうがかなり強く、しかも性差も明確に見られたという点である。とくに、かつては男性から女性に一方的に向けられていたと思われる「穏やかさ」や「家事・育児」という「家庭性重視」の期待が、今や女性から男性へと向けられている点に注意する必要があるだろう。そうした選り好みはどのような意味で「適応的」と言えるのかどうか、またどのような遺伝的形質の選択をもたらすのか、これまでほとんど議論されてこなかった。しかし、そうした選り好みは、従順性が高く衝動性が低いストレス応答システムの遺伝的形質を選択することで、自己家畜化を引き起こしている可能性が考えられる (Wrangham 2019、高橋 2024 参照)。

2 つ目には、選り好みに関する調査手法の問題が挙げられる。具体的に言えば、男性における「外見重視度」の高さは、あくまで男性内部での相対的な重視度でしかなく、女性との比較はおそらくあまり意味がないという点である。というのも、図 4 に示すように、女性のプロフィール写真に対する男性の評価はかなり甘いのに対して、男性のプロフィール写真に対する女性の評価は極めて厳しいことが分かっているからである。マッチングアプリの実際の利用においても、男性がかなり高い確率で「いいね」や「like」を押すのに対して、女性が押すのはほんの数パーセントにすぎない (Neyt et al 2019, Rudder 2014)。これらのことからすると、女性による選り好みは、「外見重視度」などにおいても男性よりはるかに厳しく作用していると考えられる。

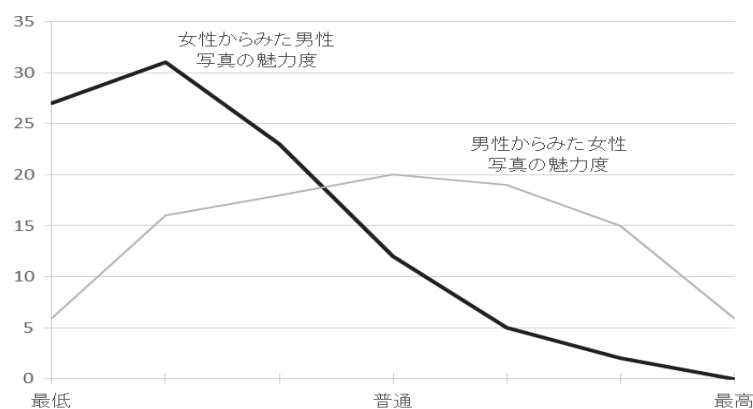


図4. OkCupidにおける異性の写真に対する魅力度評価の分布
Rudder(2009)をもとに筆者が作成した

これらの点からすると、配偶者選択は、男性の社会的・経済的地位と女性的美貌や若さの交換に止まるものではなく、より多面的でより強力な女性の選り好みによって成立していると考えられる。こうした女性による選り好みとそれがもたらす遺伝的変動については、元々 Darwin (1871) が性選択の理論において指摘したものであった。彼の知見は、ヴィ

クトリア朝の性道徳の下、ありえない理論として多くの批判にさらされた。しかしながら、今回の調査結果を見る限りでは、様々な点における女性の選り好みの強さが確認された。

4.2. 子どもへの投資意向と上昇婚志向の関連

本稿で示した調査結果からみる限り、女子上昇婚志向は、子どもへの投資意向を反映したものであり、社会的抑圧（上野説）によるものでもなければ、親の生活水準（山田説）を基準としたものでもない。もちろん、こうした関連は半ば無意識的・直感的な反応であり、必ずしも子どもへの投資費用を意識的に計算してそれに合致した相手を選択しているわけではないだろう。今回の調査では、「生活水準」という形で主に経済的費用の面を強調した質問であったために、「上昇婚志向」や「地位重視度」といった選り好みとの関連だけが明確になった。

しかしながら、「家庭性重視度」や「外見重視度」、都市志向といった選り好みも、潜在的には「子ども」の形質を選択したり、何らかの有利性を担保したりするための配偶戦略であると予想される。このような「子ども」をめぐる高規格化と高コスト化のメカニズムを理解するためには、調査手法の改良も含めて、「子ども」に対する期待の在り方を客観的かつ多面的に捉え直していく必要があるだろう。

4.3. シャインマスカット効果—都市化とマッチングアプリによる選り好み強化と未婚化

本稿での分析においては、「福岡市内居住」と「マッチングアプリ利用経験」が女性の選り好みに影響を与え、さらに未婚化にも間接的・直接的に影響を与えるという2段階の因果モデルを想定し、それを支持する結果が得られた。女性において、「福岡市内居住」は、「家庭性重視度」や「福岡志向」と正の関連が見られ、「結婚」とは負の関連が見られた。「マッチングアプリ利用経験」に関しても、「地位重視度」や「外見重視度」、「福岡志向」と正の関連が見られ、「結婚」とは負の関連が見られた。これらのことからすれば、都市居住やマッチングアプリ利用は、女性において、選り好みの強化をもたらすとともに、未婚化をもたらしていると考えることができる。

もちろん、今回の調査は一時点調査であるため、変数間の関連性を一方向的な因果関係として解釈することは出来ない。また本稿では検討しなかった変数間の複雑な影響関係も考えられる。しかしながら、男性においては、女性の場合のような関連性はあまり見られなかった。このことから考えると、戦後日本における性的自律性の増大が、配偶者選択に関して男女で異なる結果をもたらしている可能性は大きいだろう。このような影響関係をより明確にするためには、女性において配偶候補者がどのように絞り込まれるのか、また異性との交際経験が次の配偶者選択にどのようにフィードバックするのかといったプロセスを含めて検討していく必要があるだろう。

5. まとめと展望

これまで社会学においては、未婚化や少子化を引き起こしている要因として、女子上昇婚志向が経済の低成長や男女平等などの時代変化にもかかわらず継続していることが指摘されてきた。しかしながら、女性の選り好みは、男性の社会的地位や経済力だけに向けられているわけではないし、自分自身の生活水準の維持・向上や、女/男らしさのジェンダー規範への囚われといった原因から生じているわけでもない。

これに対して本稿では、Darwin (1871) の「性選択理論」や Trivers (1972) の「親の投資理論」、Prum (2017) の「美の進化理論」にもとづいて、上昇婚志向を女性の選り好みの一局面として位置づけ直すとともに、それが潜在的には「子ども」を賭け金としているがゆえに、妥協が許されないまま一方向的に強化されていくと考えた。そして、このメカニズムを明らかにする方法として、山口県と福岡県に住む 20～39 歳の男女を対象者とした WEB アンケート調査を実施し、計量的な分析を試みた。その結果得られた知見をまとめると、次のようになる。

- ①女性の選り好みは、男性の社会的地位や経済力だけでなく、穏やかさや誠実さ、外見、都市居住など様々な特徴に及んでおり、男性よりもはるかに強いと考えられる。
- ②そうした多方面にわたる選り好みは、子どもの将来の生活水準に対する関心（子どもへの投資意向）と関連している。
- ③都市居住やマッチングアプリの利用など性的自律性を高める要因は、女性においては選り好みの強化や未婚化と関連している。

もっとも本稿では、これらの知見をもとに、「女性は選り好みをもっと緩めるべきだ」とか、「女性の性的自律性を抑制すべきだ」といった主張をするつもりは毛頭ない。逆に、「男性はもっと自信を持ったほうがいい」などと男性を無駄に激励するつもりもない。むしろ、交際や結婚における選択と決定は、あくまで当事者の自由意思に委ねるべきであると考ええる。しかしながら、そうした選択や決定がもたらす不本意な結果を避けるためには、当事者たちの自由意思を動かしている直感的なヒューリスティックスの作用をできるだけ詳細かつ正確に認識しておくことが望ましいとも考えている。そして、そのことが、平等な社会を築くことにもつながると考えている。

理論的にみれば、これらの知見は、Darwin (1871) が暗示していた＜危険な思想＞—女性（雌）が美的感覚をもとに配偶者を選び、男性（雄）を改造していく—が動物だけではなく人間にも当てはまる可能性を示唆している。他方、実践面においては、都市化やマッチングアプリの普及によって、地理的にみても社会階層からみても従来の通婚圏が大幅に拡大・再編されるだけでなく、選り好みも強化されるために、未婚率の増加にさらに拍車がかかることが予想される。いずれの面においても、そのインプリケーションは重大であり、研究方法の改善も含めたさらなる対応が必要となるだろう。

[注]

- 1) 「スーパーの小汚いブドウ」(おそらくデラウェアなどの品種)も「意外とおいしい」と擁護するコメントもいくつか見られたが、山形は「クソ田舎ではない」と反論するコメントは、残念ながら皆無であった。しかしながら、山形県の婚姻状況は、他の東北 5 県とは異なり、比較的恵まれている。男性の 50 歳時未婚率は 26.2% (全国 30 位)、女性は 13.5% (全国 44 位) でいずれも全国平均を下回っている。もちろん、投稿者からすれば、こうした皆婚状況こそが、若者の性的自律性を毀損する同調圧力の強さを物語っているように感じられるのかもしれない。
- 2) 山口大学人文学部の卒業論文において、川崎直(2003)は、天草諸島や五島列島への U ターン者にインタビュー調査を行い、そのほとんどが異性関係に挫折した独身者や離死別経験者であったことを明らかにしている。親からの期待や家規範がいかに強力であろうとも、異性との交際が順調である限り、異性を連れて島に戻ることはない。このことが意味しているのは、独身者や離死別者にとってのセーフティネットとして島が機能しているということだけでなく、そもそも若者が都市を目指す真の目的が、「子ども」のスタートラインを変更するための女子上昇婚とそれに対抗するための男性の地位達成志向であるということであろう。
- 3) 図 1 の 1970 年に女性の 50 歳時未婚率が先に上昇しているのは、第 2 次世界大戦の戦死者のために、この世代の性比が極端に小さくなっていたためである。1950 年時点の 30 歳でいえば、日本全国での性比は 0.79 であり、女性は結婚難の状況にあった。ところがこの状態に、優生保護法や家族計画運動が重なり、「子ども」の選抜が強化され、未婚化や少子化に拍車がかかっていった。
- 4) 赤川(2018)によれば、少子化や未婚化をめぐる社会科学の言説は、ポリコレやイデオロギーによるタブーだらけで、とても「科学的」とは言いがたいほど歪んでいるという。しかしながら、そうした歪みは、フェミニズム団体や保守系政治団体、官僚、高齢者と現役世代といった各セクターの利害関心の対立だけで生じているわけではないだろう。その中心には、恋愛や結婚、出産といったライフイベントに潜在する素朴優生学の問題が存在しており、それを回避しようとして結果的に歪んでしまっていると考えられる。

[謝辞]

本研究は、2022 年度山口大学人文学部地域連携プロジェクト経費による助成を受けた。

[引用文献]

- 赤川学.(2018).『少子化問題の社会学』弘文堂.
- Buss, DM. (1994). *The Evolution of Desire: Strategies of Human Mating*, Basic Books. (=2000 狩野秀之訳『男と女のだましあい』草思社).
- Darwin, C. (1871). *The Descent of Man and Selection in Relation to Sex*. John Murray. (=1999-2000 長谷川真理子訳『人間の進化と性淘汰 I II』文一総合出版).
- Hrdy, S. B. (1999). *Mother Nature*. Pantheon. (=2005 塩原通緒訳『マザー・ネイチャー』早川書房).
- 川崎直. (2003). 「人は何故島に帰るのか—天草諸島・五島列島におけるライフ・ヒストリー研究—」. 2002 年度山口大学人文学部卒業論文.
- 国立社会保障・人口問題研究所. (2022). 『人口統計資料集 2022 年版』.

- Miller, G.F. (2000). *The Mating Mind: How Sexual Choice Shaped the Evolution of Human Nature*. Heinemann. (=2002 長谷川真理子訳『恋人選びの心』1・2 岩波書店)
- Neyt, B., Vandenbulcke, S., Baer, S. (2019). Are Men Intimidated by Highly Educated Women? Undercover on Tinder. *Economics of Education Review* 73 (3): 101914. DOI: 10.1016/j.econedurev.2019.101914
- 荻野美穂.(2008).『「家族計画」への道』.岩波書店.
- Prum, R.O. (2017). *The Evolution of Beauty: How Darwin's Forgotten Theory of Mate Choice Shapes the Animal World - and Us*, Doubleday.(=2020 黒沢令子訳『美の進化—性選択は人間と動物をどう変えたか』白揚社).
- Rudder, C. (2009). Your Looks and Your Inbox, *OkTrends: Dating Research from OkCupid*.(<https://web.archive.org/web/20120723173702/http://blog.okcupid.com/index.php/your-looks-and-online-dating/> 最終アクセス 2023 年 12 月 18 日).
- Rudder, C. (2014). *Dataclysm: Who We Are*. Random House Canada. (=2016 矢羽野薫訳『ビッグデータの残酷な現実』ダイヤモンド社).
- 三浦麻子・小林哲郎.(2015).「オンライン調査モニタの Satisfice に関する実験的研究」『社会心理学研究』31-1:1-12.
- 総務省統計局.(2023).『住民基本台帳人口移動報告—2022 年結果』(<https://www.stat.go.jp/data/idou/2022np/jissu/pdf/gaiyou.pdf> 最終アクセス 2023 年 12 月 18 日).
- 高橋征仁. (2010). 「＜男らしさ＞の行方～青少年の性行動における記号化と分極化」『性の健康』18(2): 32-38.
- 高橋征仁・染川みさと. (2023). 「美男子平均顔の時代変化と女性の配偶戦略の関連についての一考察」『異文化研究』17 : 71-84.
- 高橋征仁. (2024). 「ホップズ問題再訪—人間の飼い慣らしか自己家畜化か」『山口大学文学会志』74: 35-60.
- 高瀬志帆.(2018).『二月の勝者—絶対合格の教室—』2 巻.小学館.
- Trivers, R. L. L. (1972). Parental Investment and Sexual Selection. In B. Campbell Ed., *Sexual Selection and the Descent of Man: 1871–1971*, pp.136-179. Aldine-Atherton.
- 上野千鶴子(1990).『家父長制と資本制』.岩波書店.
- 上野千鶴子(1994).『マザコン少年の末路』.河合ブックレット.
- Wrangham, R (2019) *The Goodness Paradox: The Strange Relationship Between Virtue and Violence in Human Evolution*. New York: Vintage. (=2020 依田卓巳訳『善と悪のパラドックス』NTT 出版).
- 山田昌弘.(1999).『パラサイトシングルの時代』.ちくま新書.
- 山田昌弘.(2016).『モテる構造』.ちくま新書.
- 山本起世子.(2011).「生殖をめぐる政治と家族変動」『園田学園女子大学論文集』45:1-18.

所属：山口大学人文学部

E-mail : takahasi@yamaguchi-u.ac.jp